

# 日本語における主語と引用句の語順について

## 日本語と朝鮮語の現代小説対訳本の比較を中心に

金 龍

広島大学大学院国際協力研究科（博士課程後期）

〒739-8529 東広島市鏡山 1-5-1

E-mail: longjin@hiroshima-u.ac.jp

### 1. はじめに

日本語の引用研究の歴史は決して長いとは言えない。三上（1953）、奥津（1970）などが先駆的な研究と言えようが、それにしても50年くらいしか経っていないのである。三上（1953）は、早くも日本語の引用表現の曖昧さに気づき、日本語にはむしろ「折衷話法」たるものがあるのではないかと指摘した。奥津（1970）は、生成変形文法の観点から「直接話法」から「間接話法」を導く「間接話法化規則」を唱えた。それ以後、このような引用研究の流れを汲んで、引用生成の言語的メカニズム、及び日本語引用構文の構造的特徴と機能の解明を主要目的とする研究が活発に行なわれてきた。その基軸となるものは「話法」観点からの引用研究と統語的「引用論」の構築であるように思われるが、主な研究内容としては、次のような事項などがあげられる。つまり、「引用」の概念、「引用」と「話法」の関係、「引用」の統語論的位置づけ（引用標示の統語的機能）、「引用」の類型と分類、引用動詞の分類と意味分析、「引用」のメタ言語機能、「引用」とモダリティの関係、「引用」とダイクシスの関係などである。

引用研究のもう一つの流れとして引用の文体論的研究がある。そもそも日本語の引用研究は、文体論・表現論の一環として考えられることが多かったようだが、文体論研究での「引用」とは、作品（テキスト）の表現特性、作家（話者）の独自の形式特性、または広い意味での修辞的手法の一

つと見なされて来た。本稿は、従来文体論の研究対象と見なされた引用表現の語順問題を取り上げ、それをただ文体論の立場ではなく、朝鮮語との比較対照の視点から日本語の言語的特徴と関連づけて考察を行なってみたい。

### 2. 研究対象と目的

砂川（1987）は、一般に典型的な「引用文」と呼ばれるものは、引用句と引用動詞、および引用動詞の主格補語（主語）による連なりとして表現されると述べている。鎌田（2000a, 2000b）など大方の引用研究は、基本的に砂川と同じく、典型的「引用文」を主な研究対象とすることが多い。それに対して藤田（1986, 1988）は、「引用」という用語を、文中引用句「～ト」とそれが係っていく述部との結びつきとしてセンテンスにおいて成り立つ統語現象、もしくは、その相関の構造をいうものとして用い、引用句「～ト」が引用動詞と結びつかない場合も非典型的な引用と認める。藤田はこれを 類とし、砂川（1987）などの言う典型的な「引用文」を 類とする。本稿では、「引用（文）」における引用句と引用動詞の主語<sup>1)</sup>の語順を問題にするが、藤田（1986）などに従い、類とともに 類をも扱うことにする。つまり、引用句が統語的に引用動詞と結びつかない非典型的引用表現も考察の対象とする。ただし、「引用」、「引用文」、「引用句」など用語の混乱を避けるために、「引用表現」という用語を使い、それを毛

って引用句と引用動詞、及び引用動詞の主語による連なりとしての表現全体を指すことにする<sup>2)</sup>。「引用」と表現する場合もそれは「引用表現」を指す。また、「ト」を伴わない「早く来るように言った」のような類型や、主語を取らない引用表現は除外する。

引用の語順問題を取り上げた調査資料には宮島(1964)などがある。宮島は、現代雑誌九十種を資料とする各成分相互の前後傾向調査で、引用助詞「ト」の他の助詞(或いは成分)との語順傾向を提示した。引用の語順問題について文体論的な考察を行なった研究には佐伯(1975a, 1975b, 1998)などがある。佐伯は、単文あるいは節を構造上かかり部とうけ部に二分し、そのかかり部内部の語順のありようが文体の一特性を示すに足りるものとの前提に立って語順の文体論的考察を行なった。宮島(1964)と佐伯(1975a, 1975b, 1988)などは、もっぱら引用表現だけを取り扱った研究ではないが、引用の計量的研究と表現・文体論的研究においての数少ない貴重な研究資料となる。これまでの日本語の引用研究を顧みると、直接語順問題をとりあげた研究は宮島(1962, 1964)や佐伯(1975a, 1975b)の研究を除くと、管見の限りでは見当たらない<sup>3)</sup>。引用の語順研究が少ない主な原因は、日本語において語順の転換が文の命題・論理的意味の変化をもたらさないために、語順の問題がただ個人的スタイルや好み、或いは修辞的手法によるジャンルの文体的特徴として見られることが多かったからであると思われる。また、引用研究と言うと、どうしても引用表現の構造、機能ともっとも密接な関係をもつ引用句と引用動詞に焦点が置かれがちなこと事実である。

しかし、他言語との比較対照という視点、特に言語類型的に同じSOV型の自由語順言語である朝鮮語との比較対照という視点をもつことによって、日本語引用における語順研究の可能性はさらに広がり、引用の語順研究がこれまで以上に重要な意義を持つことになる。すなわち、日本語と極めて似ている朝鮮語のような言語との比較対照を行うことによって、日本語だけを考察の対象とする引用研究、或いは日本語とは極端に異なる言語との比較対照研究では見逃されがちな、個人的スタイルやジャンルを超えた「日本語文体論」的特

徴などが明らかになると思われる。また、そこで明らかになる違い(或いは差異)は、個人を超える日本語の表現の仕方に結びつく可能性があり、日本語言語共同体のコミュニケーションのあり方の理解につながる可能性もあると思われる。

本稿では、先行研究を参考にしながら朝鮮語・日本語の引用の語順に関する筆者独自の調査資料(現代小説)に基づいて、両言語の引用表現における主語と引用句の語順傾向の微妙な違いを考察し、それをもって、主語後置が日本語引用表現の語順特徴である可能性を示唆する。

筆者によるデータ資料の収集は、まず、現代小説での語順の一般状況を考察するために、日本語と朝鮮語の現代大衆小説をそれぞれ10篇ずつ選び、各篇から地の文約1万字(朝鮮語は音節)をスキャナで電子テキスト化して使用した。次に、同じ出来事や事柄の表現を前提とする対訳小説を対象に両言語の語順の異なる用例を採集し、それを分析考察の基礎資料とした。データの客観性を求めるために、対訳小説は、日本語から朝鮮語、朝鮮語から日本語、中国語から日本語・朝鮮語へ翻訳の三種類の訳本を使用した。

資料は現代小説を基本にしたが、それは現代小説対訳資料が量的に多く、比較的手にしやすい利便性があるからである。ただ、小説というジャンルには小説に特有の表現手法による語り様式の変化や個人的スタイルなど文体的要因が関係することが多いのも事実である。しかし一方、小説ではその言語の日常レベルでの特徴が凝縮された形で出てくることもあり、また、個人による固有のスタイルはその社会に共有され慣習化されたものを下地にして、その上に現われるものでもあるために、言語事実の記述に欠かすことのできない要素でもある。

### 3. 引用表現における主語の語順

典型的引用であれ非典型的引用であれ、その基本構造は、引用句と動詞(広義的引用動詞)、および動詞の主格補語(主語)などから構成される<sup>4)</sup>。

[主語]ガ/ハ+[引用句]ト+[引用動詞(広義)]

- (1) 和弘は 僕は犯人だと 言った。  
 (2) 私は そんなはずないと 思った。  
 (3) 佐藤が おはようと 入ってきた。  
 (4) 私は うそをつけと 横を向いた。

(1)(2)は典型的な引用で,(3)(4)は所謂非典型的引用と言われるものであるが,そのいずれの場合においても主語を引用句の後方,引用動詞の前方に移動することができる。佐伯(1975a, 1975b)などは,これを「変位」と呼んで,二つのかかりの間の基本語順に対する逆語順の場合に用い,かかりとつけが逆語順にある場合を指す術語「倒置」と相対させている。

日本語は自由語順言語でありながらも,典型的な動詞末尾型(Verb-final)言語である。そのため述語が文末に位置し,修飾語が被修飾語の前に位置するのが最も基本的な語順原則となる。だから,「倒置」について言えば,それが無標の基本語順に対する有標の語順であることは明らかである。一方,日本語はまた,格によって文法的機能が表示される「格標識依存型言語」,「平板構造」を持つ「非階層型言語」とも言われるように,修飾語どうしの語順(かかりの語順)が言語(文法)側の強制的支配を受けない。だから,かかり語順のあり方に絶対的な法則が存在しない。あるとすれば相対的な傾向である。佐伯(1975a, 1975b)などの「変位」と「基本語順」とは,この「相対的傾向」に基づくものであると考えられるが,「相対的傾向」とはどんなものであり,「基本語順」はどのように決まるのであろうか。かかり語順のあり方に絶対的な法則が存在しないという日本語の言語的特徴から見ると,二つの修飾語どうしの語順(かかり語順)に「基本語順」を設けることができない場合も十分予想される。

佐伯は,「変位は基本語順をもつ組み合わせにおいて可能であるが,その基本語順は一つの約束事として,母集団においてその傾向を示すことが危険率5%以下で言える場合の順序をもってする」と規定している(佐伯 1975a, 15)。佐伯の研究は,語順傾向の計量的把握の一方法として概ね我々の言語感覚に合うものであり,語順変位の研究において重要な意義を持つと思われる<sup>5)</sup>。ただ,

言語的側面から見ると二つのかかりの間の語順は,基本的に要素の語彙的特性,つまり成分自身の意味・機能的役割,述語との結びつきの強さによって決まるのである。格成分どうしの語順の場合は特にそうである。格成分の語順を決める主要な要因としては動詞の項構造(argument structure)があげられるが,項構造には動詞のとの項の意味役割が示されている。意味役割の間には,優位性に基づく階層(例えば,行為主>経験者>対象物>場所,など)が成り立ち,その階層関係によって成分の統語構造における位置が順次派生的に決まり,それがもっとも無標の語順になる。したがって,言語的側面から見ると,「主語 引用句 引用動詞」のような配列が無標の語順になると考えられる。実際,宮島(1964)の調査でも雑誌から採集した主語と引用句をもつ引用表現のうち,「は(主格) と(引用)」の語順が137例,「と(引用) は(主格)」の語順が63例,そして,「が(主格) と(引用)」語順が44例,「と(引用) が(主格)」語順が32例となっており,全体において「主語 引用句 引用動詞」のような語順の有意性が認められている。そこには,佐伯の規定に合致した「基本語順」というものが存在するわけである。

ところで,佐伯(1975a, 1975b)の研究はジャンルを小説に限定したものである。小説ジャンル特有の片寄りとして「と(引用) は(主格)」語順の頻用があげられるが,佐伯(1975a, 1975b)の引用句と主語の語順においては「基本語順」が認められていない。つまり,佐伯の小説ジャンルに限った調査では引用句と主語の語順に「基本語順」なしという結果となっている。佐伯はしかし,このように小説で「基本語順」が認められないにもかかわらず,小説における「引用句 主語 述語」の語順については,宮島(1964)の調査で導かれた一般的な傾向<sup>6)</sup>に従い,「変位」という用語を使ってほかとは異なる特別な扱いをしている。また宮島(1964)でも,第一層(評論・芸文)では他の層とは違う「は(主格) と(引用)」が10例,「と(引用) は(主格)」が13例,そして,「が(主格) と(引用)」7例,「と(引用) が(主格)」が3例となっており,主語と引用句に「基本語順」なしの数値が見られる。[表1]は筆

者の調査であるが、そこでも全体的に見て「主語 引用句 述語」(SQV) 語順の有意性は見られなかった。要するに、日本語一般においては SQV 語順の有意性が見られ、「主語 引用句 述語」の語順が「基本語順」と認められるが、ジャンルを小説に限定した場合は SQV 語順の有意性は見られず、「基本語順」を設けることができなくなるのである。しかし、前にも述べたように成分的条件に基づく語順傾向から見れば SQV 語順が無標の語順であり、また、小説ジャンルでは SQV が「基本語順」として認められないが、だとしても逆に QSV が「基本語順」になることもあり得ないことから、小説から採集した例文を基礎資料とする本研究でも SQV 語順を無標の語順と見なす。ただし、小説では佐伯の言う「基本語順」が存在しないという意味で「変位」の用語は使わず「主語の後置」、あるいは「有標の語順」という言い方をする<sup>7)</sup>。

さて、日本語の引用において SQV の語順が無標の語順であるとすれば、QSV のような配列は有標の語順となり、そして、このような有標の語順の実現には何らかの付加的条件が必要となる、ということになる。語順のあり方に影響する要素としては様々な条件が考えられるが、もっとも一般的な条件としては文脈指示語(成分に文脈指示語が含まれているか否か)、主題化(成分が主題化されているか否か)と成分の長さ(成分が複雑な構造をもっているか否か)などが指摘されている<sup>9)</sup>。主語と引用句の語順の場合は、「成分の長さ」<sup>10)</sup>という条件がもっとも積極的に働くと考え

られる。引用句はどうしてもほかの成分より長くなりやすいからである。佐伯は、長い成分である引用句が主語の前に置かれる語順について、これは理解の経済性を見越した表現意図に支えられていると指摘した。つまり、主語後置の語順が主語前置の語順に比べ受けが明快で、それだけ読み手に緊張を強いることがない、というわけである(佐伯 1998, 139)。だが、日本語の引用表現で主語と引用句が同等の長さで逆の語順をとる場合もある。これはもはや理解の経済性を越えてただ位置転換が可能というそのことだけによりかかった表現である。しかもこのような語順の表現が現代小説では頻用される。(5)(6)(7)がその例である。

- (5) 石堀と英子は言ったが、……何の特色もなかった。(『山の音』川端康成)
- (6) 「先生……」と、その時野田が又立ち上って云った。(『小さな王国』谷崎潤一郎)
- (7) 広間へ行くと、いちばん奥に、てかてかに頭を割った老人が坐っていた。坊さんだろつか、と阿Qは思った。(『阿Q正伝』魯迅 竹内好訳)

これは、日本語現代小説の引用表現において、「成分の長さ」という要因が語順のあり方に積極的に働き、その結果、長い成分である引用句が主語の前に置かれる語順が習い性となって、終には成分の長さに関係なく引用句が主語の前に置かれる傾向が強くなっている(そうではないと、そもそも「成分の長さ」という条件は引用句と主語の

[表1] 日本語(小説)の引用表現における引用句と主語の語順<sup>8)</sup>

作品	Q	Q-S	S-Q	QV	SQV	QSV	小計
挫折	0	0	0	1	8	1	10
日蝕	0	0	0	7	6	0	13
従軍	18	3	2	13	5	4	45
惑星	0	0	0	3	35	8	46
王国	29	11	0	10	7	6	63
KYOK	11	7	1	23	11	17	70
ブラ	43	0	3	1	13	28	88
友情	81	10	6	25	16	6	144
山音	88	2	2	11	13	45	161
鉄道	262	9	1	6	6	17	301
合計	532	42	15	100	120	132	941

語順に影響を与える主要因ではない), ということの可能性を示唆するのではないだろうか. 勿論, 主語と引用句の位置転換は成分の長さだけで決まることではないだけに, これもただ一つの憶測に過ぎない. ただしそれが引用表現の語順を考える上で重要な意味をもつことには間違いないと思われる.

同じ長さの主語と引用句の逆語順について, 佐伯は, 「会話そのものを強調しようとの意図が他ジャンルにおけるより, 強くかつコンスタントに働くことがある」, そして「新鮮な気のきいた表現という好印象を読み手に与えようとの意図が他ジャンルにおけるより, 強くコンスタントに働くことがある」, なお, 「この印象は寛容度のより低い逆語順をとることによって引き起される読み手の反応のひとつである」と指摘している(佐伯 1998, 140). つまり, 佐伯によれば小説での主語と引用句の逆語順の頻用はただジャンルの特性である, ということになるだろう. この問題については, 次節から朝鮮語の場合と比較しながら詳しく考察してみることにする.

#### 4. 日本語と朝鮮語の語順傾向のズレ

日本語と朝鮮語の構造的類似性は広く知られている. 両言語は言語類型的に同じ SOV の自由語順言語であるだけでなく, また, 主題と主語がほぼ拮抗する言語, つまり主題表現の中に行為者を表す用法も含まれる言語として, 英語のような主語優勢言語 (subject prominent language) はもちろんのこと, 中国語のような主題優勢言語 (topic prominent language) とも区別され, 類を共にする. そのため両言語は引用表現の構造および主語と引用句の語順転換などにおいても極めて似かよった特徴をもつことになる. 朝鮮語の引用表現の基本構造も主語と引用句と引用動詞からなる. 当然朝鮮語でも主語が引用句に後置されることもできる.

(8) Cheolsuneun “biga onda.” hago malhaessda. (チョルスは「雨が降る」と言った.)

(9) geuneun Cheolsuleul beom-in-ilago saenggaghaessda. (彼はチョルスを犯人だと思った.)

(10) Cheolsuneun biga ondago algo issda. (チョルスは雨が降ると知っている.)

(11) Cheolsudo biga ondago midgo issda. (チョルスも雨が降ると信じている.)

(12) Cheolsuneun “annyeonghi.” hago dol-aseosssa. (チョルスは「さようなら」と背を向けた.)

(8)(9)(10)(11)は藤田(1988)の言う類, (12)は藤田(1988)の類に当たる. 藤田(1988)によれば, 類は引用句と述部が引用句「~引用標示」によって示される発話と述部によって示される, 別の動作・状態とが同一場面に共存するという意味関係において結びつくと思われる非典型的な引用表現に当たるものである<sup>11)</sup>. 日本語と朝鮮語の引用は, その構造と機能などにおいて多くの共通点を持つが, しかし当然ながら微細な部分においては様々な相違点が存在すると考えられる. ここでは, 両言語の語順傾向に焦点を置いて両言語の引用表現の微妙な違いを考えてみる.

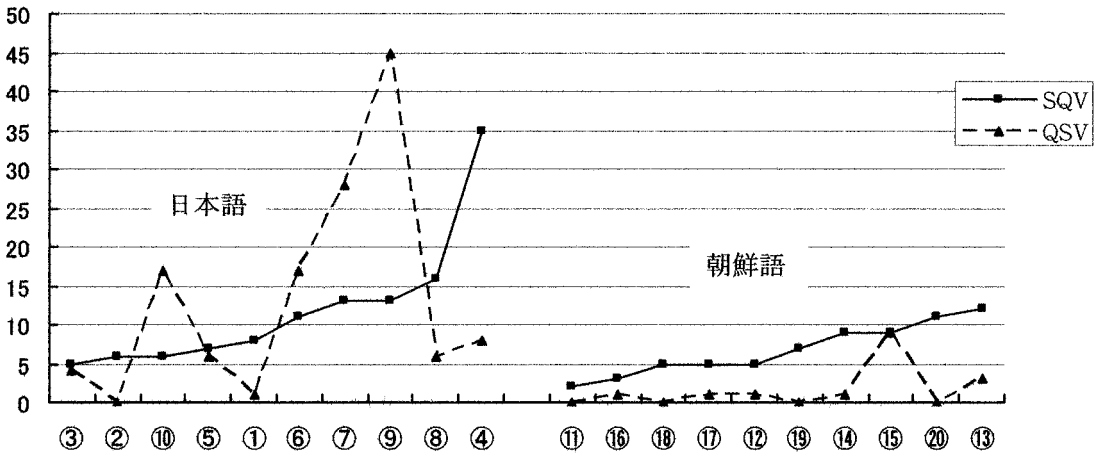
3節の[表1]は日本語の引用における主語と引用句の分布の一般状況を調べるための調査である. 全体的に SQV が 120, QSV が 132 という結果になり, 有標の語順と無標の語順の分布に有意差が見られない. これは佐伯らの調査結果などとも一致しており, 日本語現代小説で有標の語順がかなり活発に使われていることを表すものである. ただ, 作品により偏りが大きいこともうかがえる.

[表2]は朝鮮語の引用における主語と引用句の分布状況を調べるための調査であり, [表1]の日本語の場合とまったく同じ方法で調査を行っている. [表1]と[表2]の調査結果を比較してみると日本語と朝鮮語の引用表現におけるいくつかの興味深い点が浮かびあがる.

まず, 日本語の場合は有標の語順と無標の語順の分布に有意差が見られないが, 朝鮮語の場合は SQV が 68, QSV が 16 という大差が見られる. つまり, 朝鮮語では日本語のように主語後置の有標の語順が活発に使われるとは言えないのである. [表1], [表2]の SQV 語順と QSV 語順のデータを無標の語順 SQV の出現回数順に作品を並べかえてグラフに表したのが [図1]である. [図

[表2] 朝鮮語(小説)の引用表現における引用句と主語の語順

作品	Q	Q-S	S-Q	QV	SQV	QSV	小計
	17	7	2	0	2	0	28
	21	9	7	1	5	1	44
	40	8	2	4	12	3	69
	61	9	0	7	9	1	87
	79	4	11	11	9	9	123
	129	14	4	1	3	1	152
	156	12	0	7	5	1	181
	149	11	4	13	5	0	182
	127	47	4	1	7	0	186
	161	11	13	2	11	0	198
合計	940	132	47	47	68	16	1250



[図1] 日本語と朝鮮語の有標語順分布の比較

1]で、日本語はSQVとQSVが交差することが多いが、朝鮮語は作品を除けば基本的に並行する傾向にある。日本語の場合は、全体的にQSVとSQVの語順に有意差が見られないだけでなく、その分布が作品ごとにばらつきがあるそれに対して朝鮮語の場合は、作品による偏りが日本語ほどではなく、SQVの優位性が比較的是っきりと見られる。

佐伯(1975a, 1975b)は、小説でのQSV語順の頻用について、小説ジャンルでは会話そのものを強調しようとの意図が他のジャンルにおけるより強くかつコンスタントに働く指摘した。作品によつての偏りについても、作者による会話重視

の姿勢、およびその作品の文体的特徴の一つであると指摘した。それは確かにそうである。しかし、小説というジャンルの特徴なら朝鮮語でも同じはずである。とすれば、前にも述べたように朝鮮語は日本語と同じような構造的特徴を持つために有標の語順の分布においても類似的な様相を呈するだろうと予想される。にもかかわらず[表1]と[表2]の比較で分かるように両言語に違いがあるということは、ジャンルの特徴と作者の個性ということがあるにしても、少なくとも朝鮮語と比較対照する際はそれだけで片付けられる問題ではないことを示唆してくれる。一つの可能性として考えられるのは、そもそも日本語は有標の語順

が多用される言語であるのではないだろうか、ということである。このような考え方をとると、SQV と QSV の分布が作品により偏りが激しいことについてもより納得のいく解釈を与えることができそうである。つまり、作者の個人的スタイルや個性とはあくまでも社会的に共有され慣習化されたものを下地にするもので、日本語は有標の語順の使用を幅ひろく認める言語であるがゆえに有標の語順を最大限に活用する個性豊かな作品が多く見られる、と考えることができるのである。ただ、これは言語的構造という視点だけでは見極めることができないので、言語運用という視点から日本語の特徴を考えることが求められる。

次に、[表2] から見ると朝鮮語の小説で SQV と QSV の割合が81% (68) / 19% (16) となる。これに対し、宮島 (1964) の調査から SQV 語順と QSV 語順の例数を集計してみると、全体として SQV と QSV の割合が65% (181) / 35% (96) で、有標の語順 QSV の出現率が3割を超える。第一層 (評論・芸文) を差し引いても67% (164) / 33% (80) で、依然3割を超える。宮島 (1964) の調査は筆者の調査と条件が少し異なる可能性がある。直接比較するにはいささか問題があるようにも思われるが、しかし参考になる数字であることは間違いない。この数字から見る限り日本語では一般に有標の語順が3割以上使われることになる。それに較べて、小説を対象にした筆者の調査で朝鮮語の有標の語順は2割弱にしかならない。そして小説というジャンルの特徴を考慮に入れて有標の語順の割合を考えると、朝鮮語では日本語より有標の語順の使用率が一般的にかなり低いと推測できる。

もう一つ、朝鮮語は SQV, QSV の合計値が日本語よりはるかに少ないが、[表1][表2] から見ると朝鮮語の小説に引用表現 (会話文を含む) そのものが少ないのではない。全体的数値を見ると日本語が 941、朝鮮語が1250となり、むしろ朝鮮語のほうに引用表現が多い。ただ朝鮮語は引用句が独立し、引用標示によって導かれる引用動詞や主語とは直接結びつかない引用表現が多いのである。朝鮮語では Q, Q-S, S-Q の合計 (1119) と QV, SQV, QSV の合計 (131) 割合が90% / 10% になるが、日本語では63% / 37% になっている。

これは、日本語は慣用度のより低い QSV の有標の語順を使って会話そのものを強調しながら現実の会話の場面を模倣し再現して表現の劇的效果を提供する傾向があるのに対して、朝鮮語は、引用句の独立した表現を積極的に使って同じ効果を狙いながら、より慣用度の低い主語後置の有標の語順を控える傾向がある、と考えることができるかもしれない<sup>12)</sup>。また、Q-S の表現は潜在的な QSV 語順であるとも理解できるが、朝鮮語の場合 Q-S と S-Q の数値が大きいことも興味深い。つまり、朝鮮語では QSV の代わりに引用句を独立文として QSV から押し出して結果的に Q-S, S-Q のような表現となり、それが有標の語順の少ない原因の一つになる、と考えることもできる。

## 5. 対訳小説から見た語順のズレ

4節で、日本語と朝鮮語における引用の有標の語順と無標の語順の一般的な分布について考察してみたが、日本語では有標の語順と無標の語順に有意差が見られず、朝鮮語に比べて主語後置の有標の語順が多く使われる傾向があることがわかった。本節では、4節で考察した日本語と朝鮮語の語順傾向のズレを裏付ける方法の一つとして、対訳小説を資料とし、実際の作品での両言語の語順の現われ方 (対応の仕方) を考察してみたい。

記述の便利さを図るために日本語の引用表現の主語と引用句をそれぞれ A と B、朝鮮語の場合は小文字 a と b で表示しよう。そして、AB (ab) を無標の語順、BA (ba) を有標の語順にする。すると、両言語引用表現の構成素 A (a) と B (b) の配列の対応関係は、( ) AB/ab, ( ) BA/ba, ( ) AB/ba, ( ) BA/ab の四つのパターンで表すことができる。( ) と ( ) が両言語の異なる部分である。当然 ( ) と ( ) のパターンが多い。以下、資料を日朝対訳小説、朝日対訳小説、第三言語対訳小説の三つに分け、( ), ( ) について考察してみる。

まず日朝対訳小説の場合について見よう。日本語と朝鮮語の語順を比較対照する立場で対訳小説を研究資料として選択する際、概ね三つのタイプの訳本に留意する必要がある。一つは日本語学習者向けの訳本である。例えば日朝対訳日本名作シリ

ーズの『 (愛と死)』、『 (友情)』(武者小路実篤, 時事日本語社)など, 日朝対訳文庫の『 (雪国)』、『 (伊豆の踊り子)』(川端康成, )などの類である。日本語学習とともに名作も鑑賞できるという利点から数多く出回っているが, 母語との比較から有効的に日本語の習得を図るために, ほとんどが文字通りの「直訳」で, 当然これらの類では両言語の文の成分配列のズレはあまり期待できない。もう一つは一般読者向けではあるが, 訳者が意図的に原作の表現構造に従う場合である。訳者の翻訳姿勢によることであるが, 原作の表現を最大限に優先するために, ぎりぎりのところまで「直訳」し, ときには「ぎごちない表現」<sup>13)</sup>になることもある。『 (惑星の泉)』(丸山健二作 訳 )

などがその類である。三つ目は, 原作の表現スタイルなど重視しながら朝鮮語の表現法も十分考慮したと思われる訳本である。もちろん翻訳言語の表現法(或いは原作の表現法)を考慮しない翻訳などあり得ないが, その傾向から見て見分けることが必要である。本稿では前の二つの類も参考にしながら主に三番目の類を中心に考察を行なう。今回, 4組の長編小説と16組の短編小説につ

いて語順がずれるところを調べてみたが, その調査結果をまとめたのが[表3]である。

- (13) 亭主が無造作に身を入れているが, 三つの貝の身が入りまざって, それぞれの貝の身が元通りの貝殻にはかえられないだろうと, 信吾は妙に細かいことに気がついた。 > ju-in-eun igsug hage almaeng-ileul jib-eo neohgo-issneunde, Singoneun se gae-ui sola al maeng-i ga hande seokk-yeoseo jedaelo bonlae jogabisog-eulo deul-eogajineun moshal geos-ila go myohagedo geuleon jasehan dekkaji saenggag-i michigo iss-eosdda. (『山の音』川端康成)
- (14) 夫が盛大だから驚くと言った新盆の風習は, たしかに東京の常識から計り知れないほどのものだった。 > kkamijag nollal geolago nampyeon-i mili gwittwimkkaji haejudeon si jib-ui baegiung cheos jesa pungseub-eun aninge anila Tokyo salam sangsig-eulo neun sangsangdo moshalmankeum goengjanghan geos-i-eosdda. (『うらぼんえ』浅田次郎)

[表3]の数値からわかるように, 日朝対訳小説での両言語の語順の異なる部分だけを比較してみると, 例文(13)のような BA/ab のパターンが圧倒的に優勢である。[表3]では AB/ba のパ

[表3] 日朝対訳小説における語順のズレ<sup>14)</sup>

日本語原作(作者)	朝鮮語版訳者(発行)	調査範囲(空白含む大きさ)	BA/ab (AB/ba)
KYOKO (1995, 村上龍)	( )	54字×20行×120頁=129600字	12(0)
千羽鶴(1951, 川端康成)	( )	42字×17行×164頁=117096字	3(0)
山の音(1954, 川端康成)	( )	42字×18行×320頁=241920字	6(0)
死者の奢り(1957, 大江健三郎)	/ ( )	62字×29行×17頁=30566字	7(0)
日蝕(1999, 平野啓一郎)	( )	20字×15行×185頁=55500字	2(0)
鉄道員(1997, 浅田次郎)等	( )	41字×18行×285頁=210330字	8(1)
月のしずく(1997, 浅田次郎)等	( )	39字×18行×344頁=241488字	24(1)

[表4] 朝日対訳小説における語順のズレ

朝鮮語原作(作者)	日本語版訳者(発行所)	調査範囲	BA/ab (AB/ba)
(1996, )	田嶋きよこ他(双葉社)	PP10-110(長編)	0(0)
(1937, )	三枝寿勝(講談社)	PP10-110(長編)	0(0)
(1995, )	根本理恵(柏書房株式会社)	PP10-110(長編)	0(0)
(1985, )	中野宣子(学芸書林)	PP10-110(長編)	0(0)
(1988, )	李銀沢(柏書房株式会社)	PP10-110(長編)	0(0)
(1970, )	姜尚久(柏書房株式会社)	PP10-110(長編)	0(0)
(1979, )	姜 舜(東京新聞出版局)	PP10-110(長編)	0(0)
(1982, )	安宇植(新潮社)	PP10-110(長編)	2(0)



ターンの例文が2例しか現われなかった。しかも(14)のように文の直接成分ではなく、文の成分内の配列という特別とも言えそうな例文である。

次に、朝日対訳小説の場合であるが、朝鮮語学習目的で翻訳されたものはあまり見当たらない。一般読者向けの訳本がほとんどであり、日朝対訳小説資料の場合のように意図的に原文の表現構造に近づける翻訳とそうでない翻訳の二つに分けて考えることができる。

三枝寿勝訳の『濁流』(蔡萬植著)などは典型的な意図的「直訳」類である。今回、朝日対訳小説は、『南風北風』(著、姜尚久訳)など8組の長編小説([表4]を参照)を対象に調査してみたが、安宇植訳の『エミ』(著)にBA/abのパターンが(15)(16)の2例あるだけで、その他の作品でBA/abの例文が観察されなかった。

(15) geujeseo-ya naneun imo-ui maltteus-eul olhballo aladeul-eul su iss-eosdda. hajiman naneun jeoldaelo geuleolliga eobsdago ma-eum-eulo jeollejeolle dolijil-eul haessda. >それを聞いてようやく、ぼくには外叔母の言わんとするところが正確に飲み込めた。とはいえ、決してそんなはずはないと、ぼくは内心で何度となくかぶりを振った。

(16) wanjeonhi michyeodol-assda. naneun eomeoniga teul-lim-eobs-i michyeobeolin geo lago saenggahaessda. >完全に狂っていた。いや、てっきり母が狂ってしまったものとぼくは思い込んでいた。(『(母)』)

最後に、第三言語原作の資料としては中国語原作の4組の対訳小説を選択した。日本と朝鮮語の構造的類似性からみて、日本語を朝鮮語に翻訳したり朝鮮語を日本語に翻訳したりするとき、訳文

が無意識のうちに原文の表現構造に引きずられる可能性がある。一方、中国語は日本語・朝鮮語とは構造的相違が大きいため中国語を日本語、或いは朝鮮語に翻訳する際、そのような表現構造の影響を受ける可能性が少ないとも考えられる。また、中国語から日本語に訳されたものは当然朝鮮語などを意識せず、逆に中国語から朝鮮語に訳されたものも日本語など意識するはずがない。すると、中国語から日本語、或いは朝鮮語に翻訳された訳文の表現は、日本語から朝鮮語、朝鮮語から日本語に翻訳した表現よりもっとそれぞれの言語の自然な形に近い表現であるとも考えることもできるのである。その意味で中国語原作の対訳小説資料は日本語と朝鮮語対照研究の貴重な基礎資料となる。[表5]は、日本語訳文と朝鮮語訳文の調査結果をまとめたものであるが、概ね日朝対訳小説の場合と同じ傾向が見られた。ただ、『人啊，人！』(戴厚英)ではBA/abの例文は見られず、AB/baの例文(17)が1例だけ見られた。

(17) 私の心は冷え切った。祖国、人民、党、肉親、何もかも縁遠いものになった。私は、人類はもともといかなる愛情も信義も持たないのではないかと疑った。> nae ma-eum-eun ssaneulhi eol-eobut-eosdda. jogug, inmin, dang, yugsin, modeun geos-i nawaneun in-yeon-i meol-eojyeo beolyeossda. salamdeul-ege geu eotteon aejeong-ina sin-ui do eobsneun geos-i anilkka hago naneun uisimhaessda. (『人啊，人！』戴厚英)

三種類の対訳小説資料に対する調査から見ると、朝日対訳小説の場合、BA/abパターンの例文が極端に少ないが、その原因は定かでない<sup>15)</sup>。また、翻訳作品によってBA/abまたはAB/baパターンの例文の数値に偏りがあり、全体において例

[表5] 第三言語原作対訳小説における語順のズレ

中国語原作	日本語版訳者	朝鮮語版訳者	調査範囲	BA/ab (AB/ba)
阿Q正伝(魯迅)	竹内好(河出書房新社)	( )	1-8章(中篇,全8章)	5(0)
子夜(茅盾)	竹内好(平凡社)	( )	1-10章(長編,全19章)	16(0)
活着(余華)	飯塚容(角川書店)	( )	1-3章(長編,全5章)	6(0)
上海宝贝(周衛慧)	桑島道夫(文藝春秋)	( )	5-15章(長編,全32章)	4(0)
紅高粱(莫言)	井口晃(徳間書店)	( )	1-9章(中篇,全9章)	10(0)
人啊，人！(戴厚英)	大石智良(サイマル出版)	( )	1-2章(長編,全4章)	0(1)

文の数が多いとは言えない。しかし、資料により偏りはあるものの、日本語の有標の語順が朝鮮語では無標の語順になる場合はあるが、逆に日本語の無標の語順が朝鮮語で有標の語順になることはめったにないことが読み取れる。つまり、全体において微妙ではあるが日本語が朝鮮語より有標の語順が多く使われることは一貫していると言える。

## 6. 語順から見た日本語の特徴

3節で引用表現の語順に関する宮島(1964)、佐伯(1975a, 1975b)などの先行研究を検討し、なお日本現代小説を対象とした筆者の調査から、小説は一般に比べてQSVの有標の語順が多く使われる傾向があると指摘した。続く4節で、朝鮮語小説を対象とした引用表現語順分布の調査を日本語の場合と比較対照し、小説ジャンルで日本語の方が朝鮮語より有標の語順が多く使われる傾向があると指摘した。そして5節では、実際の作品における両言語の語順の現われ方を比較し、日本語が朝鮮語よりQSVの有標の語順が多く使われる現われとして三種類の対訳小説で一貫してBA/abが圧倒的に多いことを述べた。5節では朝鮮語との比較から日本語のQSV語順傾向を考察したが、日本語の引用表現が朝鮮語で同じ引用表現構造で対応されるケースに限った考察である。実際は、日本語の引用表現が朝鮮語で必ずしも同じ構造の引用表現と対応するとは限らない。しかし、両言語の引用が同じ表現構造で対応しない場合においても、日本語引用表現の主語後置の傾向を支持する例文が数多く観察される。

- (18) 夫人は菊治から目を離さないで、それで倒れるのを支えているかのようだった。この視線をはずせばなにに危険だと、菊治は感じた。 > bu-in-eun Kikuji-egeseo nun-eul tteji anh-assda. geuleom-eulosseo sseuleojineun geos-eul jitaenghago issneun dueshaess da. Kikujineun siseon-eul dollimyeon mwonga wiheomhal geosgat-I neukkyeojyeoss da. (『千羽鶴』川端康成)
- (19) 修一が会社の出張だと、英子は思っている。 > E-ikoneun Syu-u-ichiga hoesa-illo chul jang-eul ganeun

jullo al-assda. (『山の音』川端康成)

(18)と(19)は、日本語のQSVの表現が朝鮮語訳文では引用句の部分が副詞的成分として翻訳され、主語は日本語とは逆の文頭に置かれる。(18)の訳文は日本語の非典型的引用表現に似ている表現である。(19)の「jullo(-)」は引用標示としての性格が強い。しかし、いずれにしても日本語とは違って、朝鮮語では主語が文頭に置かれている。

- (20) 兄弟は多かったが、忠司を最もふかく愛した者は私であったように思うから、この六法全書は私が受けとり私が愛蔵すべきものだと、私は思ったのだった。 > hyeongje neun manh-assjiman Dadasileul gajang gip-i salanghan salam-eun na-yeosdeon geos-eulo saenggaghagi taemun-e, naega i yugbeobjeonse-oleul bad-aseo aejang hac-ya handago saeng-gaghaessda. (『挫折』石川達三, 訳)
- (21) ibeon-eneun ung-eolgeolim-i anin ttloyeosshan bal-eum-i siljelo nae gwi-e deul lyeosssda. ani, geuleohge deul-eosssdago saenggaghaessda. > こんどは口の中でぶつぶつという呻き声に似たそれではなく、発音のはっきりした言葉がぼくの耳に聞こえてきた。いや、そのように聞こえたところには思いこんだ。 (『』, 安宇植訳)

(20)は、日本語のQSV語順が訳文でQVとなり、主語が省略されている。は原文における主語の位置に対応する。逆に(21)は、朝鮮語のQV語順が日本語訳文では主語が増えてQSVの表現になっている。は訳文における主語の位置に対応する。主語の省略と言えば日本語の特徴としてよく話題になるが、朝鮮語も主語の省略が比較的自由に行なわれる。しかし一般的に言うと日本語ほどではない。通常小説にせよ一般の文にせよ日本語のほうが主語省略の傾向が強い。筆者の観察によると日本語のQSVの表現が朝鮮語で主語が省略される例文(20)のようなケースがかなり多い。これは、朝鮮語では主語後置の引用表現が日本語ほど好まれないことを示唆する。逆に言うと、日本語では省略の根本原則である「復元可能(recoverable)」の条件から言えば省略されて

もおかしくない主語が省略されないことが多いのは、日本語で QSV の語順が好まれ、それが QSV というパターンとして固定する傾向がある、と考えることができるのではないだろうか。

- (22) あれは生きている人間だ、そして生きている人間、意識をそなえている人間は軀の周りに厚い粘液質の膜を持って、僕を拒む、と僕は考えた。 > jeogeos-eun sal-a-issneun ingan-ui momjis-i teullim-eobsda, geuligo sal-a-issneun ingan-ui uisig-eul gubi ha go issneun ingan-eun mom ju-wi-e dukkeo-un mag-eul gajgo iss-eoseo naleul geobu hago issdaneun saeng-gag-i deul-eosdda. (『死者の奢り』大江健三郎)
- (23) うちの鳶や鳥は今夜どうしているだろうかと、信吾は思った。 > Singoneun uli jib soligaena kkamag-wineun oneul bam gat-eun ttae eotteohge hago iss-eulga haneun saenggag-i deul-eosdda. (『山の音』川端康成)
- (24) 英子は冷笑していると、信吾は感じた。 > Singoneun E-ikoga sog-eulo naengsohago issdaneun geos-eul neukkyeosdda. (『山の音』川端康成)

(22)(23)(24) は、日本語の引用句が朝鮮語の訳文では名詞的表現となっている。(22)と(23)は、朝鮮語の引用動詞が名詞化することで日本語の引用句にあたる部分が連体節となっている。(24)は、引用句が名詞節となって全体が目的語的機能をしている。日本語の後置主語は省略されるか文頭に置かれる。日本語と朝鮮語の対訳でこのような対応の仕方はかなり多い。

- (25) またも阿Qの耳に、このことばが聞こえる。ちげえね、女房をもらわなくて、と彼は考えた。 > Akyu-ui gwi-eneun i mal-i tto deullyeo-onda. geuneun saenggaghaessda. maj-ass-eo, yeojaga iss-eo-yaman handa. (『阿Q正伝』魯迅)
- (26) 祐次と芳枝はしばらく睨み合った。あなたにとやかく言われる筋合いでない、と芳枝の据わった目は言っていた。 > dangsin-ege ileokungjeoleokung jansolileul deul-eul ibjang-i anida. Yosi-e-ui dangdang-han nunbich-i geuleohge malhago iss-eosdda. (『オリワン座からの招待状』浅田次郎)

(25)(26) は、日本語の QSV の表現が朝鮮語訳文では引用句の部分が押し出されて二つの文に分割されている。4節でも指摘したとおり、朝鮮語では日本語の QSV の構造を分割して(25)のような S-Q か、(26)のような Q-S にすることで、日本語の主語後置のパターンが避けられる。

以上の観察からわかるように日本語の QSV の主語後置の引用表現は、朝鮮語の訳文で SQV の無標の語順に翻訳されることが多いだけではなく、主語が省略されたり引用表現が二文に分割されたりして主語後置のパターンが破壊されることも多い。これは、朝鮮語は日本語に比べて QSV 表現の使用が消極的であることを物語ってくれる。裏返せば、日本語小説には朝鮮語に比べて主語後置の QSV 表現が遥かに多く使われる、と言うことになる。

引用表現における有標の語順とは主語が引用句の後方に置かれる語順である。日本語に有標の語順が多く使われるということは、日本語で主語が引用句の後方に置かれる傾向が強いということである。日本語引用表現における主語後置の特徴を裏付けるもう一つの根拠として、引用句と連続性を持つ成分と主語との語順を挙げるができる。引用表現の構造について、引用標示「ト」によって導かれる引用句を統語論的にどのように位置づけるかに関して概ね二つの見方がある。一つは格成分として位置づける考え方であり(森山・1988)、もう一つは副詞的修飾句の一種と看做す立場(柴谷・1978)である<sup>16)</sup>。紙面の制約で詳細について紹介する余裕はないが、引用句は格成分と副詞的修飾句の二重性格を持つと理解することができる。つまり、引用成分と格成分、引用成分と副詞的修飾成分の間に連続性が見られるわけである。筆者の観察によると、その一部格成分と主語の語順、修飾成分と主語の語順においても引用の場合と同じような主語後置の傾向が見られる。例えば、主語と目的語成分の語順、主語と副詞修飾句の機能をする副詞節の語順などである。詳細は金(2003a, 2003b)を参照されたいが、ここでは例文だけをいくつか挙げる。

- (27) みごとな乳房の出た胸を、房子は掻き合わせた。 > Husakoneun mae-u tamseuleo-un yubang-i

deul-eonan gaseum-eul yeomi-eosdda. (『山の音』川端康成)

- (28) 「ye, .....jeo da al-a-yo.」 / machimnae Yeongsin-ineun deoneun chamji moshago mal haessda. ) > 「.....私みんな知ってるのよ」 / とうとう堪えきれずにヨシンが言った。(『 』)
- (29) その晩、阿Qがいつ、いびきをかき出したか、われわれにはわからない。 > ulineun inal bam akyuga onjejeum koleul golgi sijaghaessneunji al suga eobs-eosdda. (『阿Q正伝』魯迅)

(27) は、目的語成分と主語の語順において主語が後置されている。朝鮮語訳ではやはり主語が目的語の前に置かれている。日本語も朝鮮語も SOV の言語であるため言うまでもなく主語後置の語順は有標の語順である。(28) は、日本語は主語が副詞的修飾句(節)の後方に置かれた。(29) は、点線でマークされた部分が引用句の性格も持っている疑問表現節であるが、遊離性が強い。しかし日本語と朝鮮語を比較すると日本語は主語がその遊離節の後方に位置することが多い。このように引用句と連続性のある成分と主語の語順において、主語が後置する傾向があることは、引用表現で主語後置語順の整合性を示す根拠ともなると思われる。

さて、3節で述べたように佐伯(1975a, 1975b, 1998)などで日本語の小説に一般より主語後置の有標の語順が多く使われることが指摘された。そして有標の語順の頻用は小説ジャンル特有の片寄りであり、作品(作者)のスタイルによる片寄りであると指摘された。筆者の調査[表1]、及び[図1]から見てもそれは正当な指摘である。つまり、宮島(1964)の一般における調査では無標の語順の有意性が見られるが佐伯(1975a)と筆者の小説における調査では無標の語順と有標の語順の有意差が見られない。また、[図1]で示したように作品によって有標の語順の分布にはかなりの片寄りがあることも分かる。佐伯の言い方を借りると片寄りの激しい[図1]の のような作品は「会話強調明瞭型」の作品になるだろう。しかし、朝鮮語との比較ということになると、有標の語順の頻用がただ文体的(ジャンルの、個人的)特徴であるという指摘だけでは十分と言えない。

文体とは作品に現われる偏好(癖)であると理解することができる。QSVの有標の語順は、それが小説に特別に多く使われる、或いは特定の作家の作品に多く使われるという意味で文体論の研究対象となり、これまではジャンルの特徴、或いは作者の個性と見なされることが多かった。QSV表現が日本語に特別に多く使われるとしたら、それは間違いなくジャンルまたは個人のスタイルを越えた日本語全体の「文体的特徴」であり、「日本語文体論」の研究対象となると考えることができる。これまで、日本語と朝鮮語の現代小説資料におけるSQVとQSVの分布の比較、及び実際の翻訳小説における引用表現の対応の仕方についての考察から、典型的に同じ言語でありながら、日本語は朝鮮語よりQSV語順が頻用される傾向が著しく強い、ということがわかった。また、宮島(1964)の調査から見ると、小説ジャンルを除外しても、日本語のQSVの有標の語順の占める割合が3割以上となる。しかし筆者の調査[表2]によると、朝鮮語は小説ジャンルでQSVの占める割合が2割にもならない。他のジャンルより小説ジャンルに有標の語順が多く使われるのは日本語も朝鮮語も同じである。すると、朝鮮語は小説以外のジャンルにおけるQSVの割合が2割よりももっと下がる数値になると推測できる。つまり、小説ジャンルではなく、日本語と朝鮮語全般について比較しても日本語のQSV有標の語順が朝鮮語をはるかに上回ることになる。すなわち、日本語のQSV頻用の傾向は小説ジャンルに収まらず日本語全般に及ぶ可能性があるのである。

筆者の観察によると、日本語のテレビ、新聞、雑誌、研究論文や著書などでも、朝鮮語にはあまり使われない有標の語順が頻用される傾向がある。次の例文(27)は柳父章(1979, 12)の論述の一段落である。

- (30) 私の立場とは、もちろん翻訳論の立場である。このような「論理」的表現における、いかにもってまわったような翻訳調の言葉遣いを、私は問題にする。そして、そこを握り下げたところに、およそ「論理」というものの本質的な問題がひそんでいる、と私は考えるのである。

(30)で、日本語のQSV表現を朝鮮語に翻訳するなら、引用句に文脈指示語が含まれるためSQVの表現にはなり難いが、主語が省略されQV構造になるか、或いは二文に分割されQ-Sの表現になると思われる。少なくともQSVのままではかなり不自然な表現であると思われる。ちなみに、その前の文の目的語成分に後置された主語も朝鮮語に直訳するとかなり不自然な文になる。このように日本語のQSV表現をそのまま朝鮮語に翻訳すると不自然な表現になることが多い。

このように朝鮮語に比べて、小説というジャンルにのみならず、日本語全般においてもQSVの語順が使われる傾向が強いものと推測される。この推測が正しければ、それは日本語の全体の「偏好」であり、日本語全体の「文体的特徴」であると言えるのではないだろうか。

## 7. おわりに

以上、日本語と朝鮮語の引用表現における主語と引用句の語順を比較分析し、日本語に主語後置のQSV語順が多く使われる傾向があり、それが日本語全体の「文体的特徴」である可能性が高いことを論述した。ここで「文体的」という修飾語を使うのは、日本語と朝鮮語においてQSV語順とSQV語順の選択が基本的に言語側(文法)の強制的支配を受けないため、語順に現われる特徴が文体論・表現論的性格を持つからである。本稿の考察からこの文体論・表現論的性格において両言語に違いがあることがわかった。これは次のよ

うに言い換えることができる。すなわち、言語特徴の捉え方として、特定言語における諸要素の構造を中心に考察する立場と、言語構造そのものではなく言語運用の仕方を中心に考察する立場がある。言語構造から見ると、SQV語順もQSV語順も許容する「言語能力(competence)」は日本語も朝鮮語も共通に有しているが、どの程度SQVとQSV語順を使うかという「言語能力」の行使の仕方、つまり、「言語運用(performance)」に関しては両言語に差があることがわかったのである。

さて、SQV語順もQSV語順も許容される日本語と朝鮮語において、表現者は前後の文脈やその場の条件に応じてもっとも適切と思われる語順を選び取ることになるだろう。意識的にせよ無意識的にせよ、日本語のQSV語順が朝鮮語のSQV語順と対応されること(BA/ab)が多いとするなら、それには何らかの理由があると考えるのが自然である。意識的ならばそこにその語順が選択される語用論的条件が存在するはずであり、無意識的ならば、無意識にせよ表現者の心がとりわけその表現を志向せざるをえなかった抽象的な理由があるはずである。日本語と朝鮮語の語順にズレが起こる条件と理由を明らかにすることを今後の課題にしたい。

注：

- 1) 本稿では、「ガ」格主語、「デ」格主語、「カラ」格主語、およびそれらが主題化されたと考えられる

附：[表1],[表2]のテキスト出典

日本語現代小説		朝鮮語現代小説
挫折：石川達三『挫折』(1964)	:	『 ㄷ (1989)
日蝕：平野啓一郎『日蝕』(1999)	:	『 ㄷ (1981)
従軍：遠藤周作『従軍司祭』(1959)	:	『 ㄷ (1973)
惑星：丸山健二『惑星の泉』(1986)	:	『 ㄷ (1937)
王国：谷崎潤一郎『小さな王国』(1919)	:	『 ㄷ (1970)
KYOK：村上龍『KYOKO』(1995)	:	『 ㄷ (1985)
ブラ：大江健三郎『ブラジル風のポルトガル語』(1964)	:	『 ㄷ (1996)
友情：武者小路実篤『友情』(1919)	:	『 ㄷ (1995)
山音：川端康成『山の音』(1954)	:	『 ㄷ (1988)
鉄道：浅田次郎『鉄道員』(1997)	:	『 ㄷ (1996)

(\* 原作資料の発行所は略する)

主題を総じて「主語」と呼ぶ。

- 2) 「引用表現」を使うことには、用語の混乱を避けるという意味以外に、本研究が引用の統語・構文論的研究より表現論的研究の色彩を含んでいるという意味も込められている。
- 3) 樺島忠夫(1954)の「倒置法の一効果 文の要素の分凝より」(『国語国文』12月)でも引用の語順について言及しているようだが、残念ながら現時点でその資料が入手できていない。
- 4) ここで言う「非典型的引用」とは(3)(4)のような引用表現を指す。また、一般的に引用動詞と言え(1)(2)のような発話動詞、思考動詞、認知動詞などをさすことが多く、(3)(4)の表現は引用動詞が省略されたものであるとする見方が多いようだが、藤田(1988)などはそれを引用動詞の省略と見ていない。典型的な引用動詞と(3)(4)のような非典型的な引用表現の動詞は本質的な違いがあるが、本稿では語順を問題にするために(3)(4)の動詞も広い意味での引用動詞と呼ぶことにする。
- 5) 佐伯(1975b)は、同じ方法で格成分の語順傾向を「位格(トキ>トコロ)>主格>与格>対格」のように設定しているが、徳永(2000)は計算機用日本語辞書の結合価情報から格の優先順位を計算して、佐伯の研究の妥当性を検証した。
- 6) 宮島(1964)の調査対象は、五部門(評論・芸文12誌、庶民14誌、実用・通俗科学15誌、生活・婦人14誌、娯楽・趣味35誌)90種の雑誌の、昭和31年1月号から12月号までの本誌・増刊号および付録の本文である。ここで佐伯の言う「一般的な傾向」とは、宮島の五部門全体の数字から見る語順傾向を指す。宮島(1964)の調査の範囲、量のことなどを勘案すると、その調査結果が日本語全般を代表するものと考えられることができる。本稿では「一般」という表現を、宮島(1964)の五部門全体の数字を指す場合のほかに、ジャンルを限定しない「日本語全般」、或いは「朝鮮語全般」という意味で使う。なお、宮島の調査資料五部門の中、第一層の「評論・芸文」には、『群像』、『芸術新潮』、『新潮』、『芸芸』、『別冊芸芸春秋』など含まれ、佐伯や筆者の小説ジャンルに近いと思われる。
- 7) 日本語一般において SQV が無標の語順であること

は、日本語の類型論的特徴(SOV型言語)、言語普遍性から見る主語の位置などさまざまな側面から記述することができる。なお、三矢重松の指摘も貴重な資料となる。三矢は、『高等日本文法』(明治書院1908)の15章の2節「成分の位置」の「倒置」項で、「倒置せる方適当なる者なるが、前項の正置に対して之を倒置といふなり」とした。またそこに、「客部を始に置くもの」を設けて「縁なき衆生は度し難し」と釈迦は説けり、「云々と甲問へば云々と乙答ふ」など主語が引用句の後ろに置かれている例を挙げている。主語が引用句の前に置かれる語順を「正置」、つまり無標の語順と見なしているのである。また、厳密に言う、「主語の後置」という言い方には問題がある。「主語の後置」ではなく、「引用句の前置」という見方もできるからである。この問題に関しては稿を改めて議論することにする。また、ここでの「基本語順」とは佐伯(1975a)の用語を引用したものであり、言語類型論における基本語順とは異なる概念である。概念上の混乱を避けるために本稿では以下から「無標の語順」と表現する。

- 8) テキストは、長編の場合100頁目、短編の場合10頁目から括弧付き会話文を含まない地の文1万字にした。ただし、引用表現をカウントする際は括弧付き会話文を入れるが、長短に関係なく括弧に括られた全体を1つに計算する。Q(quotation)は引用句、Q-Sのようにダッシュ記号でつなぐ場合のSは文(sentence)を指し、SQVのように直接くっつける場合のSは主語(subject)を指す。Qが引用動詞を含む地の文と関係なく完全に独立して現われる場合は Q 1つで、Qの前後に引用動詞を含む文があり、ただ Q と一つの文になっていない場合は Q-S、或いは S-Q で表す。この場合は Q が単独で引用表現になる。Q が引用標示(マーク)によって引用動詞などと共に一つの文になる場合は QV, SQV, QSV のように表す。本稿での主な考察対象は SQV, QSV であるが、Qの全体的分布を把握するため一緒に調査を行なった。テキストの配列は全体において引用表現(Q)の多い順に並べた。
- 9) 佐伯(1975, 1998)、児玉(1987)、松本(1989)、野田(2000)など参照されたい。
- 10) 「成分の長さ」の条件に関しては、Dikの「言語に

依存しない構成要素の優先配列」原則, Hawkins の「重さ配列原則」などが参考になるが, 詳細については児玉 (1987), 松本 (1989) などを参照されたい。

- 11) 朝鮮語の引用研究も主に話法と統語論という二つの側面から行なわれてきた。そして, 引用句の統語論的位置づけ, 引用標示の統語的機能, 引用動詞の分類と意味・機能の分析など, 日本語の場合と同じ問題が議論の対象となっている。また, 藤田 (1988) の所謂 類に関して, 朝鮮語の場合も省略か否かという問題が提起されるが, 朝鮮語の引用標示「hago」が形式動詞の「hada」から派生されたということは日本語の引用標示研究にも示唆を与えるものがある。本稿は主語と引用句の語順だけを問題にするためそれらについて触れる余裕がないので次稿に譲ることとする。朝鮮語の引用表現の語順に関する調査と研究は管見の限りは見当らない。
- 12) 日本語と朝鮮語の引用表現が必ずしも一対一で対応するわけでもない。日本語の引用表現が朝鮮語では名詞的表現など異なる形で表現される(或いはその逆)場合もあり, それが引用表現の全体的数値に影響を与える可能性もあるので, これについてももっと調べてみる必要がある。
- 13) 翻訳の態度に関して, 『濁流 ( )』の訳者三枝寿勝は訳書の後書で次のように述べている。「... (今回の翻訳に当たって) 採用しようとしたのは原文にある文の要素をいちいち訳文に反映させるというやり方である。いわゆる直訳といわれ評判のよくないやり方に近いかもしれない。私はこのやり方で意識的にできるかぎりごちない日本語の表現を提示しようとした。... 双方の習慣が違っているというなら, こちら側が相手の習慣に合わせる可能性だって残されているはずである。」(『濁流』蔡萬植著, 講談社 P 487)
- 14) 大江健三郎の『死者の奢り』と浅田次郎の作品は短編小説である。 訳の浅田次郎の短編は『鉄道員』ほかに『ラブ・レター』, 『悪魔』, 『角筈にて』, 『伽羅』, 『うらぼんえ』, 『ろくでなしのサンタ』, 『オロロン座からの招待状』が含まれ, 訳には『月のしずく』のほかに『聖夜の肖像』, 『銀色の雨』, 『琉璃想』, 『花や今宵』, 『ふくちゃんのジャック・ナイフ』, 『ピエタ』が含

まれる。

- 15) 一つの可能性として考えられるのは翻訳者層の違いである。朝日翻訳は日朝翻訳とは比べることのできないほど量的に少ない。朝鮮半島での日本語学習と使用の歴史は長く, 今日韓国には日本語学習者数が多い。それが翻訳者層に大きく影響していると思われる。朝日翻訳の訳者がほとんど朝鮮語母語話者であるのに対して, 日朝翻訳の場合は必ずしもそうではないようである。在日韓国人・朝鮮人による翻訳が多く見られるが, 日本語に精通しているとしても微妙に朝鮮語に引きずられることが多いのではないと思われる。筆者は, 両言語の語順のズレが単に語用論的条件の問題だけでなく, もっと深い文化的な要素とも関係があると思う。
- 16) 引用句の統語的位置づけの詳細については森山 (1988), 柴谷 (1978), 藤田 (1988, 2000), 鎌田 (2000a, 2000b) などを参照されたい。

【謝辞】本稿の執筆にあたり, 深見兼孝先生に多くのご指導をいただきました。また, 匿名の査読者からも貴重な意見をいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

#### 参考文献:

- (1986), 『 』, .
- 徳永健伸 (2000), 結合価情報を用いた語順の推定, 『月刊言語』29 (9), 68-75.
- 広瀬幸生 (1988), 言語表現のレベルと話法, 『日本語学』7 (9), 4-13.
- 藤田保幸 (1983), 従属句「~カ(ドウカ)」の述部に対する関係構成, 『日本語学』2 (2), 76-83.
- 藤田保幸 (1986), 文中引用句「~ト」による「引用」を整理する 引用論の前提として, 宮地裕編『論集日本語研究(一)現代編』, 明治書院, 206-230.
- 藤田保幸 (1988), 「引用」論の視界, 『日本語学』7 (9), 30-45.
- 藤田保幸 (1996), 引用研究と「メタ言語」の概念, 『日本語学』15 (11), 44-52.
- 藤田保幸 (2000), 『国語引用構文の研究』, 和泉書院.
- 池上嘉彦 (2000), 『「日本語論」への招待』, 講談社.

- 井上和子 (1983), 日本語の伝聞表現とその談話機能, 『月刊言語』12 (11), 113-121.
- 磯部 文 (1994), かかり語順を支配するもの 意味を中心に, 『千里山文学論集』54, 51-61.  
(1998), 『』, P U F S .  
(2002), 『』, .
- 金 龍 (2003a), 日本語の複文における主語の出現位置について, 『日本学報』54, 33-46.
- 金 龍 (2003b), 語順から見た日本語らしさ, 『東アジア言語研究』6, 39-54.
- 樺島忠夫 (1965), 語順の理論と実際, 『口語文法講座 2』, 明治書院, 94-119.
- 鎌田 修 (2000a), 『日本語の引用』, ひつじ書房.
- 鎌田 修 (2000b), 日本語の引用, 『日本語学』19 (5), 140-152.  
(1999), 『』, .  
(1988), 『』, .
- 児玉徳美 (1987), 『語順の普遍性』, 山口書店.
- 久野 暉 (1973), 『日本語文法研究』, 大修館書店.
- 久野 暉 (1978), 『談話の文法』, 大修館書店.
- 松本克己 (1989), 語順のタイプと線状化の原理 語順の類型論的研究: その2, 『文藝言語研究(言語篇)』15, 1-39.
- 三上 章 (1953), 『現代語法序説』, くろしお出版.
- 宮島達夫 (1962), かかりの位置, 『計量国語学』23, 3-11.
- 宮島達夫 (1964), 助詞・助動詞の用法, 国立国語研究所編 『現代雑誌九十種の用語用字』第三分冊, 69-239.
- 三矢重松 (1908), 『高等日本文法』, 明治書院.
- 森山卓郎 (1992), 文末思考動詞「思う」をめぐって 文の意味として主観性・客観性, 『日本語学』11 (9), 105-116.
- 中島平三 (2000), 語順から言語能力と言語運用を考える, 『月刊言語』29 (9), 48-53.
- 野田尚史 (2000), 語順を決める要素, 『月刊言語』29 (9), 22-27.
- 奥津敬一郎 (1970), 引用構造とその転形, 『言語研究』56, 1-25.  
(1995), 『』, .  
(1996), 『』, .
- 佐伯哲夫 (1975a), かかり語順の文体論的考察, 『国語国文』1, 15-34.
- 佐伯哲夫 (1975b), 『現代日本語の語順』, 笠間書院.
- 佐伯哲夫 (1983), 意味と語順, 『日本語学』2 (12), 30-38.
- 佐伯哲夫 (1988), 『要説日本文の語順』, くろしお出版.
- 柴谷方良 (1978), 『日本語の分析』, くろしお出版.
- 砂川有里子 (1987), 引用文の構造と機能 引用文の三つの類型について, 『文藝言語研究(言語篇)』13, 73-91.
- 砂川有里子 (1988a), 引用文の構造と機能(その二) 引用句と名詞句をめぐって, 『文藝言語研究(言語篇)』14, 76-92.
- 砂川有里子 (1988b), 引用文における場の二重性について, 『日本語学』7 (9), 14-29.
- 砂川有里子 (1989), 引用と話法, 『講座日本語と日本語教育 4 日本語の文法・文体』(上), 明治書院, 355-387.
- 矢沢真人 (1992), 格の階層と修飾の階層, 『文藝言語研究(言語篇)』21, 53-67.
- 柳父 章 (1979), 『比較日本語論』, 日本翻訳家養成センター.



**Abstract**

**On the Relative Order of the Subject in Quotative Expressions in Japanese:  
On the Basis of Modern Japanese Novels and Their Korean Translations**

JIN Long

Graduate Student, Graduate School for International Development and Cooperation,

Hiroshima University, Higashi-Hiroshima 739-8529, Japan

E-mail: longjin@hiroshima-u.ac.jp

There have been few studies on the relative order of the (main) subject and the quotative clause in the sentence in Japanese except Miyajima (1964) and Saeki (1975a, 1975b). The reason for this scarcity is that exchanging the positions of these two elements does not change the logical meaning of the sentence in Japanese. Miyajima and Saeki regard the relative order of the (main) subject and the quotative clause as matters of genre, writer's personality, and rhetoric. A comparative study on Japanese and Korean, however, can make it clear that it is not simply a matter of genre or style of a writer. Using my own data on modern Japanese novels and their Korean translations, I indicate in this paper that the subject tends to appear after the quotative clause in Japanese. I also present my opinion that understanding of the relative order of the subject and the quotative clause may contribute to the better understanding of the linguistic characteristics of Japanese and Korean and linguistic communication in the two communities.